［論　文］

順礼塔にみる近世の旅―野田市・百番塔を中心に―

石田年子

はじめに

江戸期は、庶民が自由に旅をすることが厳しく制限された時代である。旅人達は名主が発行する身分証明（往来手形）が必携で、幕府や藩が設けた関所では厳重な通行チェックが行われ、十里以上遠くへ出かけたり、隣村に宿泊する時には事前に名主に許可を得ることが定められた地域さえあった。

ただ、神社仏閣への参詣、病気療養のための湯治、遠方に住む親戚の病気見舞いや葬式などは大目に見られたことから、徳川幕府による泰平の世が続き街道も整備される江戸中期頃になると、経済力をもった庶民の間に伊勢参りや寺社参詣を目的とした旅ブームがおこる。

野田市内には、伊勢神宮代参の旅、観音霊場順礼の旅、全国六十六ヶ所の主要社寺に納経をして巡る回国の旅、江戸後期から隆盛する富士・木曽御嶽への登拝の旅など、多彩な参詣の旅を記す石造物が残されており、意外に多くの村人達が旅を楽しんだ様子をうかがうことができる。本稿では野田地方における江戸期の庶民達の旅を、西国・秩父・坂東の百観音順礼塔（百番塔）から探ってみることとする。

一　野田市の順礼塔（百番塔）

社寺順拝は、参詣する場所・目的・仕法などにより大きく分けて三種ほどに分類できる。

①に、特定の信仰対象を何度も参拝するもので、登山回数を修行目標とする山岳信仰がそれに近く、富士山や木曽御嶽山の聖地には登拝数を刻み込んだ記念碑が林立している。②は、信仰内容にこだわらず数多くの社寺を巡拝するもので、千社札を貼り歩く千社参りなどがそれにあたる。③に、信仰対象を限定しそれに関連する場所のみを巡拝するもので、本稿で取り上げる百観音霊場や弘法大師霊場の順礼などがそれにあたる。

1．百番塔について

観音経とも呼ばれる『法華経普門品』の経文中に、観音菩薩は法華経を説く手段として三十三身に変じることが書かれている。江戸期にはこれに因んだ三十三観音霊場を巡拝することで、現世

で犯した罪が消滅し極楽往生できるとされた。その影響もあってか、日本で代表的な観音霊場である西国三十三観音・坂東三十三観音・秩父三十四観音の百ヶ所を巡る百観音霊場への順礼が庶民の間に広がりをみせ、江戸後期にはこの地に観光を兼ねた巡礼者達が年に数万人も訪れる順礼コースとなっている。

その百観音霊場を全て参詣し終わり満願成就となると、順礼者は記念碑的に百番塔と称される石塔を立てることも行った。管見の調査では、九十四基の百番塔が野田市内にも造立されている。

2．野田市の百番塔について

表1に示したように、市内で確認した九十四基の百番塔は単に百番順礼だけでなく、それに加えて出羽三山登拝を行った「三山百番塔」や四国の弘法大師霊場八十八ヶ所も巡拝した「三山百八十八ヶ所供養塔」など多様なものである。（本稿ではそれらを総称して百番塔とする）

図1に見るように、江戸中期には観音順礼と四国霊場が中心の百番塔であったが、江戸後期に入ると順礼者数の増加と共に、百番塔に出羽三山登拝も刻み込んだ重層塔が目立ちはじめ、幕末から明治にかけてはそれが主流となってゆく。

野田市は千葉県全体から見ると、富士・御嶽講に圧されて出羽三山信仰は低調であったが、江戸後期より百観音順礼の仕上げとして出羽三山を登拝する事が慣習化し始めたことがうかがえる。

（1）百番供養塔の種類と詳細

（イ）百番供養塔

西国三十三霊場・坂東三十三霊場・秩父三十四霊場の百ヶ所を巡拝した後に記念碑的に造立した供養塔である。千葉県内では木更津市吾妻・平等院の寛文八年（一六六八）造立のものが初期の百番塔であるが、野田市では享保十二年（一七二七）に瀬戸・八坂神社境内に初めて造立されている。この年の八月、瀬戸村の藤田谷左衛門が建てたもので、中央に聖観音立像が刻まれ、正面右に「奉順礼西国坂東秩父百處成就所」との銘文がみえる。

これから二十七年後の宝暦四年（一七五四）、野田上町・西光院の参道に、野田町十一名により二百ヶ所の観音札所を順礼したことが記された順礼塔が造立されている。彼らは百観音を二度巡礼しており、いずれも当時の野田町の有力町人である。

宝暦期には石塔だけでなく、木野崎地区・遍照院の観音堂に宝暦九年（一七五九）に地元五名の施主による「坂東西国秩父諸願成就」の奉納額も確認でき、宝暦十二年（一七六二）六月には兵

図1　三山百番塔・百番塔造立数の推移

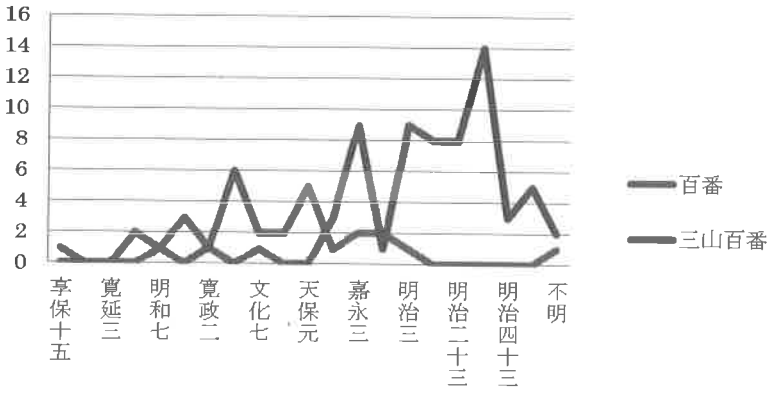
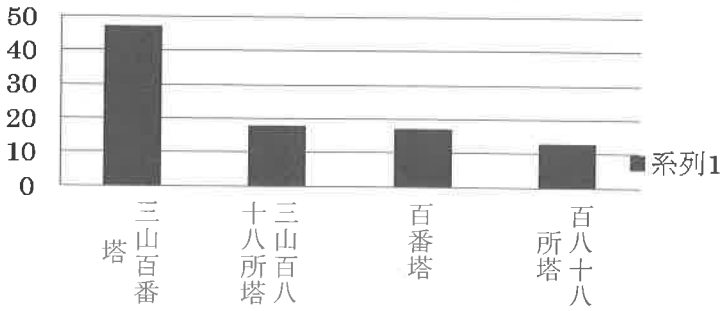


図2　種類別百番塔数



庫県加西市の西国二十六番札所・一乗寺の本堂から福田地区・瀬戸村の住人などが残した六枚の順礼札（詳細後述）が発見されている。これらのことから、当地方の観音順礼は江戸中期後半の宝暦期から本格的に始まったと推察される。

瀬戸・八坂神社
百番塔

（ロ）　百八十八所供養塔

先の観音霊場百ヶ所の順礼に加えて、四国八十八ヶ所の遍路を行った供養塔を百八十八所供養塔とよぶ。市内での初出は目吹・花光院墓地に造立されているもので、順礼者は意外にも妙空比丘尼と名乗る尼僧である。

宝暦九年（一七五九）に造立され、上部に優しいお顔の延命地蔵像が乗っている。

【銘文】（塔身正面）

乃　至　法　界

奉造立供養地蔵尊四国西国秩父坂東霊地参詣□

平　等　利　益

（塔身右側面）

宝暦九卯十月吉日　　行者　妙空比丘尼

（塔身左側面）

下総国葛飾郡庄内領目吹村　瀬能治左衛門母

左側面の銘文には「瀬能治左衛門母」とある。瀬能姓はこの地域周辺に多い姓であり、妙空比丘尼は地元の女性の宗教者であったようだ。行者という特殊な女性であったことから百八十八ヶ所が完遂できたのか、それとも既に江戸中期には女性達も容易に長旅が行える旅環境が整っていたのかなど興味の湧くところである。

目吹・花光院
百八十八所供養塔

（ハ）　三山（月山・湯殿山・羽黒山）百番塔

百番観音順礼と出羽三山登拝を行った供養塔である。

先の花光院墓地内に立つ百八十八ヶ所供養塔と並んで延命地蔵塔が祀られている。これは明和二年（一七六五）に目吹村の瀬能源兵衛と次左衛門が造立したもので、次左衛門は先の妙空尼の息子と考えられる。

塔の銘文は「奉納西国秩父坂東順礼百箇所為二世安楽也」に続き「奉読誦普門品一千巻羽黒山大権現御宝前所願成就修」とある。これは百番順礼のほかに羽黒山に登拝して普門品（観音経）を一千巻読誦したことが記されたもので、当然、湯殿山や月山も登拝しているはずであり、江戸後期から始まる三山百番塔の先駆けと云える。

三山百番塔の造立が本格的に始まるのは江戸後期からで、寛政二年（一七九〇）に灰毛地区の個人墓石に現れ、明治を経て昭和四十七年までに四十七基が造立されている。百番巡礼の総仕上げとして出羽三山に登拝することが慣習化した明治以降の百番塔は、出羽三山を加えたもの以外は確認できていない。

左の写真は子孫宅の入口に立っている天保十五年に造立された三山百番塔である。道標も兼ねたこの塔は、かつては奥州と江戸を行き交う旅人達が利用した「長谷の渡し」と呼ばれた渡し場のそばに立っていたもので、「七十一翁　川邊傳右衛門」による造立である。右側面には数首の和歌も刻まれ、石塔全体から「巡拝大願成就」の喜びが伝わってくる石塔である。

木間ヶ瀬・出州
三山百番塔

（二）　三山百八十八所供養塔

百観音順礼と四国八十八ヶ所遍路に出羽三山登拝をプラスした重層塔は、完遂までの日数も費用も膨大なものとなることから、三山百番塔から比べると造立数はぐっと少なくなる。

野田上町・西光院の参道に、出羽三山の山影を浮彫し、左面に出羽三山に登拝した芭蕉が羽黒山を詠んだ句「涼しさやほの三日月の羽黒山」が刻まれた総高二・五メートルほどもある堂々たる三山百八十八所供養塔が建てられている。これは天保期に野田中町の商人であった八代目中川仲右衛門（兵三）が造立したもので、子孫の中川喜介氏によれば、「中兵」の屋号で手広く商売を行っていた当主は、同時期に長野・善光寺に巨大な石灯籠（現存）の寄進をはじめ、市内の寺社にも多くの喜捨を行った信心深い人物であったという。

【銘文】（塔身正面）

四国　　天保十二辛丑十一月吉祥日

月山　西国　　天下和順
湯殿山　奉順禮百八十八箇所供養
羽黒山　秩父　　日月清明　当所中町
坂東　　願主　中川仲右衛門

（塔身左側面）

涼しさやほの三日月の羽黒山

上町・西光院
三山百八十八所供養塔

（2）　順礼者（百番塔造立者）の社会的地位

他地域のことは不明だが、墓石に百番順礼の銘文が刻んであるものが四十二基と非常に多いのは、この地方の特徴だろうか。故人が生前に自身の死後の成仏と先祖供養を願って順礼を行い、それを墓石に刻むことで、冥土へのアピールとして子孫が刻み込んだもののようである。墓石を百番塔とするか否かは異論のあるところであるが、順礼内容には大きな違いはなさそうである。

これら百ヶ所の観音霊場・四国八十八ヶ所・出羽三山等を回ることは、信仰心は言うまでもないが膨大な時間と費用がかかることから、完遂できる人物は村の富裕層である大地主や有力農民が大半であろう。そのこともあってか百番塔が順礼者宅の門前に祀られている事例が八基ほどあり、塔を造立することは順礼者本人

の大きな誇りであると同時に、当家の富を象徴する事柄でもあったのではないだろうか。

旧家の前に立つ百番塔

（3）百番順礼の方法（船形村・栗原喜三郎の旅日記より）

庚申塔や念仏塔など多くの供養塔の造立が村単位や講中（グループ）によるものであることに比べると、百番塔は圧倒的に個人による造立が多く、講中での造立は意外に少ない。同一グループで全行程を回ることはあまりなく、機会を見つけてコース別に結成された講に参加するなどして、生涯をかけて百観音の順礼成就を目指したようである。

その一例を野田市内に残された旅日記から追ってみることにする。

平成二十三年に野田地方史懇話会が刊行した『伊勢・西国巡礼旅日記』は、船形村・栗原喜三郎が文久二年（一八六二）に記した旅日記「伊勢太々西国順礼〈諸国参詣日記印」を解読した書である。

この旅日記は、船形村の伊勢講二十六人が伊勢の御師邸で太々神楽を奉納する行程と、帰路に喜三郎を中心とするグループが辿った四国・西国諸国順礼の記録から構成されている。

文久二年（一八六二）十二月十七日に船形村を出立した伊勢講二十六人は、無事に翌文久三年正月八日に伊勢に到着し、澤潟太夫邸で太々神楽を奏行した後、現地で解散して帰路に着くのだが、その記述に、

「正月十二日（中略）夫ヨリ十三日朝、中河原舟場ニテ分レ西国拾二人、七在所六人、五ケ所五人、信州善光寺懸テ国元帰リ三人、西国之方ハ夫ヨリ宮川上渡船渡リ無銭也」

とあり、現地で解散後、二十六人はそれぞれ四つのコースに分かれて帰ったようである。旅日記の筆者である喜三郎は西国観音霊場を廻る十一人と行動を共にし、四十日後に香川県丸亀港から舟に乗り金毘羅山への参詣を終えると、更に四国八十八ヶ所遍路を行うため順礼を続ける八名と別れ、四人で四国に向かう。遍路は三十八日かけて満願成就し、その後再び西国順礼を続行して、船形村には四月末に帰郷している。

喜三郎（襲名・治良兵衛）はこの旅から三年遡る安政六年（一八五九）に船形村六名と共に三山百番塔を既に造立しており、西国順礼は二度目の可能性があり、この旅の狙いは四国八十八ヶ所の完遂であったようだ。

なお、喜三郎の順礼を反映したものか、栗原家の墓所には明治十六年（一八八三）に巨大な墓石が造立され、上部に篆書による三山百番の文言が大きく刻まれている。

この事例のように遠国の四国・西国順礼は伊勢参りのついでに行い、近場の関東の坂東・秩父霊場などはそのつど参詣の講に参加するなどして一生かけて順礼を成就し、百番塔を造立したと思われる。

二　西国観音札所一乗寺札にみる野田市の順礼

平成二十一年に(財)元興寺文化財団研究所により刊行された『兵庫県加西市・一乗寺の歴史資料（順礼札）の調査とデータベース化』という資料がある。これは平成十二年から行われた加西市の

西国二十六番札所・一乗寺本堂の解体修理に伴い、本堂の天井などに打ち付けてあった大量の順礼札が一時外されたことから、(財)元興寺文化財団研究所が札に記された順礼者達の氏名・出身地・奉納年・同行者を判読してデータベース化したものである。資料に記された順礼札数は千三百枚ほどであるが、実際に確認した数は二万八千枚と云う気の遠くなるような数であるらしい。

一乗寺の順礼札

その内容をみて東関東の利根川水系の地域からの順礼者が多い事に興味が湧く。特に旧関宿町周辺の境町・五霞町・栗橋町・幸手市などの講が江戸初期から確認されている。

千葉県内では寛永期から宝暦期までに三十一グループがこの寺に順礼札を残しており、当寺でも早い時期に属する寛永十八年(一六四一)五月には布施村(柏市)の五人の一行、明暦四年(一六五八)には小林村(印西市)からの順礼者がみえる。

野田市の順礼者の情報を抜き取って別表としてみたが、市内では貞享・元禄・宝永・宝暦期に四グループ三十四枚の順礼札が残されていることがわかる。札に記された同行者数は表でわかるように数十人単位の講で、貞享元年(一六八四)に野田市木間ケ瀬地区から二十七人が参詣しており、二十年後にも同地区とその周辺の村から十五名が順礼に訪れている。

元禄期と宝暦期には同じ利根川べりの瀬戸・三ケ尾・灰毛村の順礼札もあり、これはやはり伊勢参りの帰路に回ったものと考えて間違いないだろう。

これらのことから、野田地方の人々は百番塔が出現する以前から恒常的に活発な参詣旅行を行っていたことが判るのである。

おわりに

野田市内の石仏調査を始めた頃、時折、旧家の門前に建つ立派な百番塔を見かけて首をかしげた。又、旧家の墓石に百番塔の文言が刻まれたものがあることにも気づいた。通常の墓石はもとより、江戸後期というのに立派な宝篋印塔であったり巨大な自然石碑であったりと百番塔は妙に主張が激しいのである。その特異さに興味を持ち墓石も含めて収集した百番塔は九十四基。結論は野田地方の富裕層が富の象徴として造立した旅の記念碑と位置づけたがどうであろうか。

百番塔から得た当地方の旅の情報は以上であるが、これは氷山の一角で、多くの人々が旅を楽しんだことは確かなようである。

最後に資料・『兵庫県加西市・一乗寺の歴史資料(順礼札)の調査とデータベース化』を御恵与下さった天理大学教授・幡鎌一弘氏に心からお礼申しあげます。

【参考資料】

『日本石仏事典』雄山閣出版　昭和五十年
『民間信仰を中心とする野田市金石調査資料集』野田市市史編纂委員会　昭和四十二年
『関宿町の石造物』私家版　拙著　平成十四年
『伊勢・西国巡礼旅日記』野田地方史懇話会　平成二十三年
『兵庫県加西市・一乗寺の歴史資料(順礼札)の調査とデータベース化』元興寺文化財団研究所　平成二十一年

(いしだ・としこ　当館展示協力員)

表１．野田市の百番塔（種類別）一覧

総No.	No.	種類	所在地	造立年	西暦	備考
1	1	百番塔	瀬戸　八坂神社境内	享保十二年八月吉日	1727	個人
2	2	百番塔	野田上町　西光院門前	宝暦四年四月吉祥日	1754	講中(8)
3	3	百番塔	西三ケ尾道添	宝暦十一年十一月吉日	1761	個人
4	4	百番塔	丸井１１４　丸井共同墓地	安永三年月日	1774	個人
5	5	百番塔	岡田１４８先　福寿院入口	寛政元年二月吉祥日	1789	個人
6	6	百番塔	台町　福寿院	寛政九年二月吉日	1797	不明
7	7	百番塔	東金野井加藤道側	寛政十一年霜月吉祥日	1799	個人/墓石
8	8	百番塔	木間ヶ瀬大山　大日堂墓地そば	文化四年	1807	個人
9	9	百番塔	山崎　鏡円寺境内	文化五年十月十八日	1808	個人
10	10	百番塔	中里阿部　妙楽院境内	文化十一年十月吉日	1814	不明
11	11	百番塔	岡田７６７隣　香取神社	文政十年一月吉日	1827	個人
12	12	百番塔	中根八幡　元法蔵寺跡路傍	文政十一年三月	1828	個人
13	13	百番塔	三ツ堀　円福寺前墓地	文政十二年三月吉日	1829	個人
14	14	百番塔	中里　満蔵寺境内	天保七年四月吉祥日	1835	講中
15	15	百番塔	今上　秀覚寺	弘化三年二月吉日	1846	個人
16	16	百番塔	船形　富蔵院境内	嘉永六年三月吉日	1853	個人
17	17	百番塔	中里阿部　染谷家墓地	幕末	1867	個人
18	1	百八十八所塔	目吹　花光院墓地境内	宝暦九年十月吉日	1759	個人/女性
19	2	百八十八所塔	船形　富蔵院境内	安永三年十一月吉日	1774	講中
20	3	百八十八所塔	丸井　丸井共同墓地	安永三年月日	1774	個人
21	4	百八十八所塔	上花輪　観音堂墓地	寛政五年十月立之	1793	個人
22	5	百八十八所塔	東金野井　西福寺境内	寛政七年八月十五日	1795	個人
23	6	百八十八所塔	船形　富蔵院境内	寛政十年四月吉祥日	1798	個人(2)
24	7	百八十八所塔	野田下町　無山坊	寛政十年正月吉日	1798	個人
25	8	百八十八所塔	東金野井　須賀神社	文化十三年三月吉日	1816	個人
26	9	百八十八所塔	木間ヶ瀬飯塚　協同館横	文政十年十一月吉日	1827	個人
27	10	百八十八所塔	上花輪　観音堂	嘉永二年三月廿一日	1849	個人
28	11	百八十八所塔	野田下町　安心坊	嘉永五年四月吉日	1857	個人/夫婦
29	12	百八十八所塔	岩名　真光寺境内	不明		個人
30	1	三山百番塔	目吹下　花光院墓地	明和二年二月	1765	個人(2)
31	2	三山百番塔	上灰毛　個人墓地	寛政二年八月	1790	個人/墓石
32	3	三山百番塔	吉春　外和堂墓地	文化六年十一月	1809	個人
33	4	三山百番塔	中里阿部　個人墓地	天保五年十月	1834	個人/墓石
34	5	三山百番塔	上灰毛　青年館墓地	天保六年	1835	墓石/僧
35	6	三山百番塔	木間ケ瀬出洲　個人宅	天保十五年三月	1844	個人
36	7	三山百番塔	目吹　花光院参道	弘化二年十月	1845	講中
37	8	三山百番塔	大殿井　浜野家墓地	弘化三年八月以降	1846	個人/墓石
38	9	三山百番塔	岩名二　五区自治会館	弘化五年二月	1848	個人
39	10	三山百番塔	大殿井　不動院墓地	弘化五年十一月	1848	個人/墓石
40	11	三山百番塔	船形　上自治会館墓地	安政六年十一月	1856	講中(8)
41	12	三山百番塔	中里阿部　羽黒神社	文久元年十月	1861	講中(6)
42	13	三山百番塔	中里阿部　個人墓地	文久二年八月	1862	個人/墓石
43	14	三山百番塔	木間ケ瀬下根　丸山土手	文久二年	1862	個人
44	15	三山百番塔	上三ケ尾　鹿野山墓地	文久三年三月	1863	個人/墓石
45	16	三山百番塔	瀬戸　勢至墓地	慶応二年正月	1866	個人/墓石
46	17	三山百番塔	上灰毛　青年館墓地	明治二年	1869	個人/墓石
47	18	三山百番塔	木野崎下町　大日堂墓地	明治五年九月	1872	個人/墓石
48	19	三山百番塔	大殿井　浜野家墓地	明治五年十一月十五日	1872	個人/墓石
49	20	三山百番塔	木野崎　新町自治会館墓地	明治七年二月	1874	個人/墓石
50	21	三山百番塔	木間ケ瀬小作　山王墓地	明治九年	1874	個人/墓石
51	22	三山百番塔	船形石塚　瀬能家前	明治十一年	1874	講中
52	23	三山百番塔	木野崎高根　恵空寺	明治十三年六月	1880	個人/墓石

53	24	三山百番塔	船形　上自治会館墓地	明治十六年三月	1883	個人/墓石
54	25	三山百番塔	東金野井　松村家前	明治二十年四月	1887	個人
55	26	三山百番塔	船形　上自治会館墓地	明治二十年四月	1887	個人/墓石
56	27	三山百番塔	東金野井　染谷家	明治二十一年五月	1888	個人/墓石
57	28	三山百番塔	木間ケ瀬下根　丸山土手	明治二十一年二月	1888	個人
58	29	三山百番塔	瀬戸　長久寺	明治二十二年九月	1889	個人/墓石
59	30	三山百番塔	木間ケ瀬下根　香取神社	明治二十二年十一月	1889	講中(3)
60	31	三山百番塔	木間ケ瀬前村　個人宅前	明治二十四年九月	1891	個人
61	32	三山百番塔	保木間　個人墓地	明治二十七年十二月	1894	個人/墓石
62	33	三山百番塔	瀬戸　勢至墓地	明治二十七年十二月	1894	個人/墓石
63	34	三山百番塔	瀬戸　八坂神社	明治二十八年七月	1895	講中(3)
64	35	三山百番塔	船形　上自治会館墓地	明治二十八年十月	1895	個人/墓石
65	36	三山百番塔	船形　上自治会館墓地	明治二十八年十二月	1895	個人/墓石
66	37	三山百番塔	木間ケ瀬出洲　個人宅	明治二十八年四月	1895	個人
67	38	三山百番塔	船形　久保第一集会所	明治三十二年	1899	個人/墓石
68	39	三山百番塔	木間ケ瀬〆切　個人宅	明治三十三年	1900	個人/墓石
69	40	三山百番塔	木野崎高根　恵空寺	明治三十四年	1901	個人/墓石
70	41	三山百番塔	瀬戸　江川墓地	明治三十八年	1905	個人/墓石
71	42	三山百番塔	木野崎本郷　個人墓地	明治四十三年七月	1910	個人
72	43	三山百番塔	中里阿部　個人墓地	明治四十四年三月	1911	個人/墓石
73	44	三山百番塔	東金野井　個人宅前	大正五年七月	1916	個人
74	45	三山百番塔	上灰毛　青年館墓地	大正六年	1917	個人/墓石
75	46	三山百番塔	瀬戸　勢至墓地	大正九年二月	1920	個人/墓石
76	47	三山百番塔	上灰毛　青年館墓地	昭和四十七年	1972	個人/墓石
77	1	三山百八十八所塔	鶴奉　大日堂墓地	天保十一年二月	1840	個人
78	2	三山百八十八所塔	野田上町　西光院入口	天保十二年十一月	1841	個人
79	3	三山百八十八所塔	中里　西岸寺墓地	天保十四年正月	1843	個人/墓石
80	4	三山百八十八所塔	清水　八幡神社	嘉永元年七月	1848	個人
81	5	三山百八十八所塔	上花輪　観音堂墓地	嘉永二年三月	1849	個人/墓石
82	6	三山百八十八所塔	野田下町　安心坊	安政四年八月十八日	1857	個人/墓石
83	7	三山百八十八所塔	下三ケ尾　泰道院墓地	文久元年九月	1861	個人
84	8	三山百八十八所塔	船形猪穴　個人墓地	慶應元年十一月	1865	個人/墓石
85	9	三山百八十八所塔	中里　西岸寺墓地	明治初期	1868	個人/墓石
86	10	三山百八十八所塔	瀬戸　土塔墓地	明治十三年三月	1880	個人/墓石
87	11	三山百八十八所塔	清水　個人墓地	明治十三年七月	1880	個人/墓石
88	12	三山百八十八所塔	三ツ堀　個人墓地	明治十八年一月	1885	個人/墓石
89	13	三山百八十八所塔	瀬戸　土塔墓地	明治二十九年一月	1896	個人/墓石
90	14	三山百八十八所塔	宮崎　松降院墓地	明治三十年五月	1897	個人
91	15	三山百八十八所塔	船形　上自治会館墓地	明治三十一年八月	1898	個人/墓石
92	16	三山百八十八所塔	船形明代　個人宅前	明治三十二年三月	1899	個人
93	17	三山百八十八所塔	船形山中　個人宅前	明治三十二年十二月	1899	個人
94	18	三山百八十八所塔	新田戸　個人宅前	大正三年四月	1914	個人

表2. 西国二十六番札所・一乗寺に残る野田住民の順礼札一覧

総No.	No.	現在の所在地	出身地	順礼した年	西暦	順礼札の主銘文	同行人数	順礼者名
1	1	野田市木間ケ瀬	[ ] 関宿領木間ケ□	天和三年亥五月 [ ]	1683	[ ] 国廿三処順礼 [ ]	同道三十人	
2	1	野田市木間ケ瀬	下総国荘内領木間ケ瀬村	貞享元年子ノ五月吉日	1684	キリーク サ サク 奉納西国廿三所順礼観音敬白	同道廿七人	沢田彦兵衛
3	1	野田市木間ケ瀬	下総国庄内木間ケ瀬村	貞享元年甲子五月 [ ] 日	1684	キリーク サ サク 奉納西国廿三所順礼二世安楽敬□		鈴木 [ ]
4	1	野田市木間ケ瀬	木間ケ瀬村	貞享元年子ノ五月拾八日	1684	キリーク サ サク 奉納西国廿三所順礼為二世安楽	同道廿人	蓮井甚 [ ]
5	1	野田市木間ケ瀬	下総国庄内木間ケ瀬村	貞享元年五月吉日	1684	キリーク サ サク 奉納西国三十三所順礼二世安楽敬白		大和庄 [ ]
6	1	野田市木間ケ瀬	[ ] 内木間ケ瀬		1684	[ ] 白	同道廿七人	
7	1	野田市木間ケ瀬	[ ] 間ケ瀬村	[ ] 亨元年子五月吉日	1684	[ ] 西国廿三処順礼観音□□		[ ] 惣七
8	1	野田市木間ケ瀬	下総国庄内領木間ケ瀬村	貞享元年子ノ五月吉日	1684	□□□奉納西国廿三処順礼観音敬白	[ ] 廿七人	見神権吉
9	1	野田市カ	下総国葛飾郡庄内領倉□□	貞享元子五月吉日	1684	キリーク サ サク 奉納西国巡礼二世安□		
10	2	野田市瀬戸	庄内領瀬戸村	元禄十年六月吉日	1697	サ 奉納西国順礼二世安楽		
11	2	野田市三ケ尾	下総国庄内領三ケ尾村	元禄十丁丑五月吉日	1697	キリーク サ サク 奉納西国順礼為二世安楽也	同行廿五人	平井山三郎
12	2	野田市三ケ尾	下総国葛飾郡庄内領三ケ尾村	元禄十年丑六月吉日	1697	サク 奉納西国三十三所順礼二世安楽所	同行廿七人	秋山 [ ]
13	3	野田市木間ケ瀬	下総国庄内領木間ケ瀬村	宝永三戌年五月吉日	1706	キリーク サ サク 奉納西国廿三所順礼二世安楽	同行十五人	松本文蔵
14	3	野田市木間ケ瀬	下総国葛飾郡庄内木間ケ瀬村	宝永三天五月吉日	1706	キリーク サ サク 奉納西国廿三所順礼二世安楽処 敬白	同行十五人	石 [ ]
15	3	野田市木間ケ瀬	木間ケ瀬村	宝永三年六月吉日	1706	キリーク サ サク 奉納西国廿三処順礼二世安楽		岩神伝四郎
16	3	野田市木間ケ瀬	下総国庄内領木間ケ瀬村	宝永三丙戌	1706	キリーク サ サク 奉納西国廿三所順礼二世安楽処 敬白		青木金四郎
17	3	野田市木間ケ瀬	木間ケ瀬村	宝永三年六月吉日	1706	キリーク サ サク 奉納西国廿三所順礼二世安楽		上山三郎
18	3	野田市木間ケ瀬	下総国庄内領木間ケせ村	宝永三 [ ]	1706	キリーク サ サク 奉納西国廿三所順礼二世安楽処		藤井新介
19	3	野田市木間ケ瀬	下総国庄内領木間ケ瀬村	宝永三戌六月吉日	1706	キリーク サ サク 奉納西国廿三処順礼二世安楽祈処	同行十五人	舘岡彦次郎
20	3	野田市木間ケ瀬	下総国庄内領木間ケ瀬村	宝永三年五月吉日	1706	キリーク サ サク 奉納西国廿三所順礼二世安楽処	同行十五人	舘野岡次 [ ]
21	3	野田市木間ケ瀬カ	下総国葛飾郡世貴宿領新関村	宝永三年五月吉日	1706	キリーク サ サク 奉納西国廿三所順礼二世安楽	同行十人	勘左衛門
22	3	野田市古布内	下総国関宿領古布内村	宝永三年戌ノ五月吉日	1706	キリーク サ サク 奉納西国廿三処順礼二世安楽祈処	同行拾五人	倉持平介
23	3	野田市古布内	下総国関宿領古布内村	宝永三戌歳五月吉日	1706	キリーク サ サク 奉納西国廿三所順礼二セ安楽所	同行拾五人	舘岡長吉
24	4	野田市上灰毛	下総国庄内領上灰毛村	宝暦十二壬午年六月吉日	1762	サ 奉納西国三拾三所為二世安楽也	同行	風見甚蔵
25	4	野田市上灰毛	下総国庄内領上灰毛村	午六月吉日	1762	サ 奉納西国三十三処為二世安楽也	同行	小倉源七
26	4	野田市上灰毛	下総国庄内領上灰毛村	午六月吉日	1762	サ 奉納西国三十三所為二世安楽也	同行	藤田平六
27	4	野田市上灰毛	下総国庄内領上灰毛村	午六月吉日	1762	サ 奉納西国三十三所為二セ安楽也	同行	新村源六
28	4	野田市上灰毛	下総国庄内領上灰毛村	午六月吉日	1762	サ 奉納西国三十三所為二世安楽也		坂井重蔵
29	4	野田市瀬戸	瀬戸村	宝暦十一壬午年六月吉日	1762	サ 奉納西国三拾三所為二世安楽也	同行	青山利助
30	4	野田市瀬戸	下総国庄内領瀬戸村	宝暦十二壬午年六月吉日	1762	サ 奉納西国三拾三所為二世安楽也	同行	風見金次
31	4	野田市瀬戸	下総国庄内領瀬戸村	宝暦十二午年六月吉日	1762	サ 奉納西国三十三所為二世安楽也	同行	秋田千之助
32	4	野田市瀬戸	下総国葛飾郡瀬戸村	宝暦十二壬午年六月吉日	1762	サ 奉納西国三十三所為二世安楽也	同行	風見文四郎
33	4	野田市瀬戸	瀬戸村	宝暦十二壬午年六月吉日	1762	サ 奉納西国三拾三所為二世安楽也	同行	青山伝介
34	4	野田市山崎	下総国庄内領山崎村	宝暦十二午年六月吉日	1762	サ 奉納西国廿三処順礼為二世安楽也	同行	栗原源右衛門